



総長回章 第四号

創立者を知り 愛し 彼に従う

マヌエル・ホセ・コルテス, SM
マリア会第十四代総長

2010年9月12日
マリア会の保護の祝日である
マリアのみ名の祭日に

目 次

I.	ある特定の召命における創立者たちの役割	4
1.1	創立者たちの生涯：奉献生活の多様な形式とその異なったカリスマの 起源と源泉	4
1.2	必要不可欠な創立者の記憶	7
1.3	創立者と修道者個人の召命	10
II.	み言葉の語り部；信仰の先祖たち	12
2.1	“私たちの先祖の神”	13
2.2	エリヤの外套	16
2.3	“私はあなたがたをキリストにおいてもうけました”	20
III.	私たちの「良き父」“Bon Père” “Good Father” 福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード	26
3.1	ルイス・ゴンサルベス・ダ・カマラとロヨラの聖イグナチオ	26
3.2	マリア会における創立者についての知識	29
3.3	創立者の道をたどる — 私たちが今からなすべきこと	35

創立者を知り、愛し、彼に従う

親愛なる兄弟の皆さん、

2011年は私たちの創立者、福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードの生誕 250 周年に当たります。全マリアニスト家族がこれを祝おうとして準備に入っています。この一年間を通して、創立者がどんな人であったか、どのような生涯を送ったかを記念し、考察するため、全ての枝、全てのレベルでの一連の率先的な取り組みがなされようとしています。これらの取り組みはすべて、福者シャミナード師についての知識を増し、彼に対する評価を深め、そして何よりも彼に模倣するよう計画されています。この祝いがマリアニスト召命を生きる私たちの生き方を刷新する良い機会となることを私たち全員が願っています。

以上のことを念頭に置きつつ、そしてこの刷新に貢献することを願って、『創立者を知り、愛し、彼に従う』と題するこの回章をお届けするのは時宜にかなっているように思われます。これまでの三つの回章の場合と同様に、この回章は、教会と世界における私たち独自の存在理由を再活性化し、深める助けとなりたいという私の懸念と関心、そして責任から生まれました。今回、私が特別に目標とするのは、この再活性化がどのように生じるのかを私たちに理解させてくれるような一連の考察を皆さんと分かち合うことです。このことは創立者をよりよく知り、より密接に彼に従っていくことで達成されます。ですから、これは創立者についての回章です。とはいえ、これは彼の生涯や思想についてではなくて、創立者がマリアニスト召命と私たち自身の召命において占める役割についての回章なのです。この意味で、これは『創立の精神』の第一分冊の発行に際してヒス総長が記した素晴らしい序文の、丁度一世紀後のこたまであり、それを敷衍するものです。¹ この序文を思い起こされる方は

¹ ヒス総長がこの序文に署名したのは 1910 年 5 月 1 日のことでした。

誰でも、容易に、これから述べることの中に『創立の精神』の痕跡があると気づかれることでしょう。私はヒス総長が提唱されたことに心から同意して来ました。このように『創立の精神』と目標を共有するので、この回章も、「シャミナード年」を通して私たちの生活を動機づけ、私たちの生活を中心点に向けさせることに寄与することを希望します。さらにまた、私たちマリアニスト家族内での研究、特にマリアニスト養成を鼓舞するものとなるよう願ってやみません。

I. ある特定の召命における創立者たちの役割

1.1 創立者たちの生涯：奉献生活の多様な形式と その異なったカリスマの起源と源泉

この考察を始めるに当たって、上記の序文の中でヒス総長が記した数節を引用したいと思います：

「教会が、人の力で、または人間の最高の組織とか偉人・傑人の才能によって支えられる機構でないことは、誰でも知っている。教会はそのようなものではなく、これに生命を与えて下さったのは超自然の源であり、教会を創設された、われわれの主イエス・キリストの聖なる魂そのものである。イエス・キリストは、聖霊降臨の日に、教会に新たな命を吹き込まれた。教会はイエス・キリストの御意向にすなおに従い、その教えを忠実に守っているので、十分にその目的を達成している。**これと同じように、ある意味では、修道家族は、その創立者の精神によって生かされている。**別の言葉で云うならば、修道家族は、創立者から修得した徳を行い、会の特色を外部に示さなければならない。・・・

実際、イエス・キリストは、修道会に与えようと望まれる特色を、創立者によって会の中に広められる。カトリックの各種の修道会が、すべて、それぞれ違った目的のもとに、神なるイエス・キリストの完徳を完全な姿で広める使命もっていることは、少し周囲を観察す

るだけで十分理解することができる。これらの修道会のなかで、単独でキリストの精神に秘められた種子とすべての恩恵を豊かにいただけるものはひとつもないだろう。なぜなら、修道会を組織する人達も同じであるが、各修道会は活動範囲が限られている。それで、修道会の間には、活動の分担のようなものが作られている。各修道会は、特別の徳目を高度に追求し、それを会の異色の長所として広めることを任務としている。このようにして、各修道会は、会の精神を堅持し、この精神は、修道会に対して、他の会とは明確に区別される種類の活動を割り当て、特別の事業を予定している。・・・

この特別なキリストの霊の形は、最初に、創立者に対して与えられた。**それが自分自身をまずはっきりと現わすのは、創立者の人格においてである。**キリストから預けられた精神は、これを大事に保存する場所として、創立者のなかに宿った。この精神は、創立者の心から湧き出して、創立者のもとに光と指導を求めに来る人々の心に分配されるだろう。・・・」²

それから半世紀以上もたった後で、第二バチカン公会議は次のように断言しています：

「教会の初期から、福音的勧告の実行によって、より自由にキリストに従い、より密接にキリストにならおうと志し、それぞれ自分に適した方法で神に奉献された生活を送った男女がいた。その中の多くの人々は、聖霊のすすめをうけて、あるいは独居生活をいとなみ、あるいは修道家族をつくった。教会はその権威によってこのような生活様式をこころよく受け入れ、認可した。このようにして、神の計画によって、すばらしい多様性に富む修道者たちの諸集団が誕生した。この多様性は、教会がすべての善いわざを行ない、キリストの体を築くための奉仕を行なうことができるようにしたばかりでなく、教会がその子らの種々のたまものによって飾られて、花婿のために着かざった花嫁の姿をとり、これによって神の多種多様の

² 『創立の精神』、3-(1)、p. 7 以下。

英知が知られるようになった。」³

このように、種々の異なった形式を有する奉獻生活は、御主に従うために自分たちの生涯を捧げたこれらの“男性・女性”を起源としています。彼らは、全生涯を“それぞれ独自の方法で”、つまり、聖霊の特別なインスピレーションに従って、即ち、**それぞれのカリスマ**に従って捧げたのです。それ故に一そして、私たちは常にこれを念頭に置いておかねばならないのですが—このカリスマは福音をどのように告げ知らせるかという計画から出たものではなく、またアカデミックな神学的思索から生まれたものでもありません。それは宣言や文書に基づくものではなく、あるいは、指針、規範、生活の規則にさえ基づくものではありません。それは創立者たちのキリスト教的な生活、つまり、福音に基づく彼らの特別な生き方から生じるものです。

ヒス総長が繰り返し述べているように、聖霊の息吹きのあるところ、組織はメンバーの数を増し、事業を拡大しながら発展することを、教会の歴史は教えてくれます。この創立者の福音的生き方を伝えることが必要な時が確実に来るのです。「このようなきとき考えられることは、多数の会員のなかに、また次の世代の会員のためにも、一貫した精神を保たせるため会則を作ることである。**しかし会則の価値と効果は、編集された会則の外形によってはきまらない。**それは、特に会則に含まれている精神からまず生まれてくるものである。・・・」⁴

要するに、ヒス総長の言葉と公会議文書が私たちに述べていることは、創立のカリスマは、靈性神学についての論文からも、道徳的行為の規範からも出て来ない、ということです。そうではなくて、カリスマは、聖霊に対して忠実に生きた具体的な一人の人間の生涯から来るということです。これらのカリスマの信憑性とその力は、時が来てカリスマを体系的に述べようと試みる説得力のある論文の力に根ざすものではなく、また、カリスマに刺激を受けた賛同者や弟子の数に基づくものでもありま

³ 『修道生活の刷新・適応に関する教令』(Perfectae caritatis), n. 1.

⁴ 『創立の精神』、3-(1)、p. 8 以下。

せん。創立のカリスマは、この聖霊に対する忠実さ、即ち、**創立者たちの聖性**に基づいているのです。

ですから、(よく知られたある修道会での最近のケースのように)、創立者の生涯の聖性が明白な事実により疑問に付されるような場合、結果として起こってくる本当の問題は、乱れた生活が引き起こした損害の修復ではなく、彼が残すことになる「カリスマであると主張されてきたもの」の信憑性と有効性なのです。⁵

しかし、他方では、創立者の聖性が立証され、更に、認定されますと、その固有なカリスマは教会の中で強化され、確認されることとなります。多分、これは 10 年前の私たちの創立者の列福の結果として、マリアニスト家族が経験したことではないでしょうか？この列福がマリアニストのカリスマの認知とこれを生きる上で私たちにもたらした好結果は紛れもない事実です。それ故、私たちはこの認知が教会の中で全面的で、普遍的な崇敬にまで拡大されるよう熱烈な望みと大きな関心を抱いています。どうか御主が福者シャミナードの列聖を祝うことが出来るお恵みを私たちに早く与えてくださいますように！

1.2 必要不可欠な創立者の記憶

奉獻生活の種々の様式がその創立者たちの生涯から生まれるものであるとすれば、その奉獻生活の存在そのものが正当化されたものとして存続し続けるためには、創立者の受けた靈感に忠実であり続ける必要があります。そうでなければ、奉獻生活の種々の様式は教会と世界におけるその存在理由を失ってしまいます。

この忠実さは、私たちが生きている現代のように文化的な変動の時代にあっては尚更必要なものとなります。前回の総会文書を紹介した折に皆

⁵ 私たちが言及しているこの修道会に対してなされた教会側からの調査に関して、2010年5月1日付で公表された聖座の公式発表が、その修道会の将来を確かなものとするために直面する必要がある緊急な任務の一つは、まさにそのカリスマの再定義である、ということをどのように指摘したかを思い起こしましょう。

さんに申し上げた通り、私たちは「修道生活とマリアニスト生活に関する色褪せつつあるイメージと、未だ明白には姿を現していない別のイメージとの間の変化と移行の時代に生きています。マリア会内での意見聴取の結果がはっきりと示しているように、現代は不確実の時代であり、将来を前にしての不安が渦巻いているのです」。このような状況の中で、私たち固有のカリスマに基づくアイデンティティー、即ち創立者への忠実、を強化し、再活性化することなしには、信念と希望をもって未来に立ち向かうことはできません。私が続けて申し上げましたように、「未来に臨むためには、私たちは個人と共同体の生活において、教会と世界における私たちのアイデンティティーを示すしるしを強化する必要があります。別言すれば、私たちは未来がどのようなものか未だはっきりと分かっていませんが、未来があることを確信しており、御主に信頼してそれを待っているのです、何故なら、私たちは何故、そしてどんな目的で御主が教会と世界の中にマリアニスト修道者がいることを望んでおられるか知っており、それ以上に、それを自覚し、信じているからです」。⁶

第二バチカン公会議以降、奉獻生活を刷新する必要について述べた全ての公式文書は、この刷新が適切に遂行されるかどうかの不可欠の条件として、創立者の靈感への忠実という基準を強調してきました。ですから、私たちは創立者の記憶を絶えず私たちの意識の前面に保ち続けることが絶対必要だと分かります。でもそれは、「文書記録としての記憶」ではなく、むしろ靈的に靈感を与え、動機を与えてくれる「生きてそこにあるものとしての記憶」なのです。

関連する文書の中で、教皇パウロ六世の『修道生活の福音的証し』

⁶ ヒス総長は、どの修道会も存続することを望むなら、その創立者の精神に忠実であり続ける必要のあることに言及しています：「修道家族がこの精神によって活気に満ちている限り、繁栄するだろう。ある日、修道会が修道者の過失のために、創立者の精神を幾分でも失いかけるか、これから遠ざかることがあれば、修道会はそのような状態では会の生命を左右する精神を失い、遠からず消滅するだろう。したがって、キリスト教信者としての普通の心掛けをもつだけでは足りない。修道会の創立者の精神を、会のなかに生かしていくことが必要である。」（『創立の精神』、3-1、p. 7）。

(*Evangelica testificatio*)⁷ は恐らく最も示唆的なものです。男女修道者に自分たちの生活の中での観想と使徒的熱意を刷新するよう説き勧めた上で、教皇は次のように述べています：

「そうするところから、教会の中に神によって始められたあなたがたの創立者のカリスマに従って、あなたがたは人々の心を神の真理と愛に目覚めさせるであります。この様にして公会議は、修道者が各々の創立者の精神、彼等の福音的意向、彼等の成聖に倣って忠実であらねばならないと、正しく強調しております。創立者の精神への忠実さこそ、今行なわれている刷新のひとつの原則であり、各修道会がどのような計画を持とうとも、それらに対してのもっとも確実な基準の一つとなるものです。」⁸

ですから、創立者たちの“精神”、創立者たちの福音的意図、彼らの“聖性の模範”への忠実を養ってくれるのは記憶です。そして、そのためには、創立者の生き方を歴史的に知ること、単に上辺だけ模倣することでは足りません。私たちの中に、創立者との真の霊的絆を発展させる助けとなる、生き生きとした記憶、意識の中の生き生きとした現存が必要です。ですから、肝心なことは、創立者自身がそうであったように、今、ここで、私たちが聖霊に応える心構えを持ち続けなければならないということです。(以下、パウロ六世『修道生活の福音的証し』続き)

「なぜなら、修道生活のカリスマは、《血肉》から生まれた力ではなく《この世にならう》メンタリティーより出たものでもなく、教会の中に絶えず働いている聖霊の実だからであります。

そこにおいてこそ、各修道家族がそれぞれの力を再びとりもどすのであります。何故なら、もしも神の呼びかけが時と場所による不安定な条件によって新たにされ、又多様化されるのであるとしても、変ることのない方向づけを要求するのであります。この神の呼びか

⁷ 1971年6月29日 公布。

⁸ n. 11。

けに応える内的な駆動力は、人の存在の深みにおいて根本的な選択を要求します。これらの要求への忠実さこそ、修道生活の真実性に触れるものではないでしょうか。忘れてはいけません。人間の作った全ての制度は、動脈硬化症に狙われ、形式主義におびやかされているのだということを。ですから外見的なものへの規則正しさだけでは生活の価値と、その深い忠実さを保証するには足りません。**絶えず内的な駆動力を以って外的な形式を生かしていかなければならないのです。**これなしには、外的な形式は、すぐに非常な重荷になってしまうでしょう。」⁹

修道会内の創造的忠実にとっての鍵は、教皇聖下の言われる通り、“内的な駆動力”の中に、つまり創立者の内部に深く形成されたこれらの根本的な人生の選択に従って生き抜くということです。これらの選択を見出し、自分のものとするのが、最終的に、創立者の記憶を生きたものとして保ちながら私たちが努力することなのです。

1.3 創立者と修道者個人の召命

修道会の独特の生き方を生み出す上で創立者たちが果たす役割についてこれまで私が一般的に述べてきたことは、また一人ひとりの修道者自身の召命についても同様のことが言えるでしょう。前回の回章の中で私は申し上げたことですが、私たち個々人が体験する修道生活への具体的召命は、**一般的な“修道生活”への召命**というような一般的な形で生じ、それから、その中である特定の生き方に具体化するものではありません。そうではなく、修道生活への召命は、最初から、同時に、この特定の具体的な様式への召命なのです。私が書いたのは「修道生活への召命はカリスマを通して生じます。カリスマは修道者に神のご意志をはっきりと示し、それを受肉させる方法を定めます。カリスマは修道者の共同生活の生き方と同様、ミッションを遂行する方法をも具体的に示してくれる」ということでした。¹⁰

⁹ n. 11–12。

¹⁰ 総長回章第3号、3.2参照。

従って、一人の修道者の召命にとって、創立者という人物は見知らぬ人ではありません。もしこの個人の召命が、カリスマを受肉化する召命であり、また、創立者に基礎を置き、彼に霊示を受けているとすれば、創立者は、私たち各人が御主から受けた召命の仲介者として、特別な任務を果たしているのです。私たちはこの召命に対して自分自身の同意を与えるので、このことは、呼びかけの際だけではなく、聖霊によって私たちの中に生じる生活においても当てはまるのです。このことを私たちは明確には意識していないかもしれませんが、これは全く明白な真実です。私たちがこの真実を納得するには、もしも創立者が存在しなかったら私たちはどうなっていただろう、と考えるだけで充分でしょう。もちろん、マリアニスト召命なるものは存在しなかったでしょうし、私たちはここにいなかったでしょうし、今そうである者(マリアニスト修道者)でもなかったのです。

通常、この創立者の仲介的役割は、私たち皆が自分自身の召命を識別するときに持つ体験のその始めの頃は、はっきりとは意識されません。他のより同時代的な仲介、即ち、より直接的で今の時代の仲介、— 例えば、カリスマを伝えるある特定の共同体や人物、即ち、宣教活動や兄弟愛の体験 — は、私たちが召命を生きる最初の段階で、もっと目立った印象を私たちに与えます。とはいえ、単にそのレベルに留まることは、皮相的に、無定見に留まる危険を冒すことになります。というのは、それらの仲介は、深く掘り下げてみれば、依然として二次的、一時的なものに過ぎないからです。当初は、特定の証しにチャレンジを受け、惹きつけられるとしても、それは真の召命の単なる痕跡、しるしに過ぎません。召命のより深い意味を発見し、その真の内容を把握するためには、既に述べたように、根源にまで掘り下げた根本となる仲介の深み、即ち、他でもない創立者の生涯そのものを調べる必要があります。すべての修道会において、自分たちの特定の召命についての理解を深め、それを生きるというこの原動力をその会員たちに紹介することが、初期養成であれ継続養成であれ、あらゆる養成過程において避けて通ることの出来ない目標であるのは、この理由によるのです。このことは、会員たちが創

立者との霊的一致の中に生きるのを助けることによって完成されるのです。

このように、私たちの個人的な人生の歩みにおいて、創立者の姿は、私たちが自分の人生の手本とする単なる模範、模倣すべき者として私たちに示される多くの聖人たちの一人ではありません。今まで見てきたように、創立者は私たちの召命において特別な仲介者の役割を有してきたし、また、これからも果たし続けなければなりません。従って、創立者は私たちの心の中で、特別の注意と、独特の愛着（帰依）に値するのです。自分たちの創立者に対して心からの、深い尊敬を抱かない本物の修道者が存在し得るなどと考えることは、思いもよらないことです。創立者を知り、更に忠実に彼に従うことに関心を、真の情熱さえ、抱くことは、神が私たち一人ひとりに望んでおられることをよりよく理解し、それに合致して生きることができるときの**欠くことの出来ない条件**です。

II. み言葉の語り部；信仰の先祖たち

奉獻生活の何らかの様式、ある具体的なカリスマを生きることへの一人の人の独特な召命における創立者の果たす仲介的役割を知れば、この仲介がどのような形をとるのか知りたくなるのは当然です。それは単なる模範としての仲介なのか、あるいは他の何かでしょうか？ それをどのように理解し、述べることが出来るでしょうか？ 私は、この第二部で、これらの質問に答える助けとなる幾つかの聖書に基づく考察を皆さんに提供したいと思います。

でもなぜ聖書に頼るのでしょうか？それは、この仲介の性質が何であるにせよ、それは神の計画を示すものであり、神の御計画の中に刻み込まれたものであって、従って、私たちは、この仲介が救いの歴史を通した神の“御業の進め方” (modus operandi) とでも呼ぶことのできるものとどのように調和しているのか、を理解するよう努めねばならないからです。更に、聖書の物語の引用は、この仲介の理解を、理論的というよ

りも、より経験的なものとしてくれるからです。このタイプの仲介は、それ自体、神学的な範疇で説明できます。私がしようとしている考察は、結局は、創立者たちの仲介的役割についての論文を書くことではなく、むしろ、私たちの特別な神との関係、神のみ言葉を第一の糧とする関係、の歩みの中に統合された（創立者たちの仲介的）役割を生きることに関するものなのです。

2.1 “私たちの先祖の神”

先ず、救いの歴史における神の啓示は、神の存在についての哲学的思索の結果としてのものではない、ということをお願いすることから始めましょう。それは、神の存在の定義によっても、議論によっても生じません。そうではなく、この啓示は、神の現存の中に生きるように選ばれた人々の生涯を通して生じてきます。モーセに対する神の自己啓示は、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」としてでした。¹¹ そして、モーセが、人々に示すことが出来るように、神は誰であるか、を名前でもって知りたいと願った時、答えは再び次の通りでした：「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が私をあなたたちのもとに遣わされた。「これこそ、とこしえに私の名、これこそ、世々に私の名」。」¹²

私たちの神、私たちが信じる神は、信仰の道で私たちに先だった人々の生涯の中にご自分を現される御方です。彼らの生涯はいわば「声」であり、人々はその声を通して神の語りかけを聞いたのです。神の言葉は、書かれた文書に表現される以前は、ある生涯において、生涯の具体的出来事において、選ばれた民の個人的及び集团的歴史において啓示されません。神の啓示についての私たちの理解に深い含蓄を持つ今や有名になった表現で公会議が断言したように、「この啓示の計画は**互いに密接に関連したわざとことば**をもってなされた。そのため救いの歴史において神から遂行されたわざは、ことばによって意味される教えと現実を明らか

¹¹ 出エジプト 3・6。

¹² 出エジプト 3・15。

に示し確認する。そして、ことばはわざを表示し、その中に含まれている秘義を明らかにする。」¹³

ですから、人類との神の交わりは文書に限定されるものではありません。聖書テキストは、「信仰における私たちの先祖たち」の具体的生涯を通して、神の生命そのものの伝達と密接に関連づけて考えられます。一方では、この生命と関係なしでは、テキストは意味のないものになってしまうでしょうし、他方、テキストなしでは、この交わりの意味は隠されたままとなってしまいます。この原則は、神の最終的なみ言葉であるイエス・キリストにおいて、完全な意味を獲得します。啓示憲章は続けます。「この啓示が示す神と人間の救いに関する深遠な真理は、仲介者であり、同時に全啓示の充満であるキリストにおいてわれわれに現れている。」¹⁴ 「神は、幾度となく、種々の方法で、預言者たちによって語ったが、最後に、このほど、御子によってわれわれに語った。実際、神は人間の間にとどまって神の秘義を人間に示すため御子、すなわち、すべての人を照らす永遠のみことばをつかわした。人となったみことばであり、“人間につかわされた人間”であるイエス・キリストは、“神のことばを語り”、父からおのれに託された救いのわざを遂行する。したがって、彼を見るものは父を見ると言われる。**そのキリストは、自分自身の全的現存と顕現とにより、**ことばとわざにより、しるしと奇跡により、なかでも、おのが死と死者の中からはえある復活とにより、最後に真理の霊の派遣によって、**啓示を完全に成し遂げ、**神がわれわれを罪と死のやみから救い、永遠の生命に復活させるため、われわれとともにいるということをもつて証明している。」¹⁵

それで、神は人性におけるイエス・キリストの「存在と人としての顕現」を通してご自分を啓示されます。イエスこそ仲介者なのです。聖アウグスティヌスは神の前に告白しています。「そこで、私はあなたを味わい得るだけの力を身につけようと道を探しましたが、神と人間の仲介者

¹³ 『神の啓示に関する教義憲章』（Dei verbum）、n. 2。

¹⁴ 同上。

¹⁵ 同上、n. 4。

である人間イエス・キリストを抱くまでは、ついにこの道を見いだすことができませんでした。」¹⁶。アウグスティヌスにとって神との交わりが明確になったのは、思索においてではなく、書物においてでもなく、人間イエス・キリストの抱擁においてだったのです。この抱擁は私たちをキリストと共に神の中に生きるようにしてくれる聖霊の交わりを伴う生命そのものによる抱擁なので、神との交わりはまた生き生きとしたものになります。聖書の話は私たちをそのような交わりに留意させますが、しかし、聖書の話そのものは、この交わりを完全には包含もしないし、引き起こすこともありません。生命は言葉に含まれ得ず、言葉で伝達され得ません。そして、それ故、キリスト教信仰は聖書テキストへの単なる言語学的アプローチによって育まれることはできません。それがどんなに合理的で、有益であるにせよ、言語学的アプローチは聖書の言葉が伝える最終的な意味にも、真理にも、生命にも決して到達することはないのです。同じ理由で、キリスト教生活の正しい理解の中に、どのようなタイプの聖書原理主義もあり得ないのです。

従って、神の啓示における人間の仲介という原則は、時代を通して、救いの摂理に含まれることになります。言い換えれば、この原則は聖書を構成する全正典書が書かれた時だけに該当するものではないということです。この原則は実際の歴史を通して鍵となる原則であり続けるのです。同じ完全な仲介は、即ち、それはキリストなのですが、真の証人たちの仲介を通してその時代のものとなるのです。これらの証人たちの生涯を通して神の言葉が伝達されない限り、即ち、聖者たちが生み出してきたし、また、今も生みだし続けている生きたエネルギーがない限り、聖書そのものは単なる過去の文学的証言に留まっていたことでしょう。だからこそ、私たちは信仰宣言の中で、「聖徒の交わり」を信じます、と告白するのであり、この「聖徒の交わり」の外には、神の語りかけを受け取る道、あるいは、神と交わる道はないのです。ヘブライ人への手紙の著者は信者たちに次のことを思い起こさせています：神との出会いのために、彼らは燃える火や人間の耳がこれ以上語ってもらいたくないと

¹⁶ 聖アウグスティヌス『告白』、第7巻、18章。

願ったような言葉の声に近づいたのではありません；彼らが近づいたのは「天のエルサレム、聖徒たちの集まり、そして、新しい契約の仲介者イエス」なのです。¹⁷ 今までに述べてきましたように、キリストの仲介を拡張し、体現することに貢献したこれらの聖徒たち、彼らと共に、彼らを通して、私たちが自分の人生において神のご計画との出会いを発見し、経験してきたこれらの聖徒たちの中であって、創立者たちは、勿論、卓越した役割を占めているのです。

2.2 エリヤの外套

神の呼びかけにおける人間的仲介の原則を掘り下げるために、私は皆さんに預言者エリヤとその弟子エリシャの関係、および、この関係がエリシャの生涯で果たした役割について思いめぐらすことをお勧めいたします。これは、このテーマを考えるにあたっての旧約聖書の最も重要な物語の一つです。事実、この物語は、新約聖書において私たちが御父の至高の仲介者であるイエスと弟子たちとの関係を理解するその背景となっています。

エリヤはホレブ山での孤独の中に神と出会い、自分の後を継ぐ預言者としてエリシャに油を注ぐという神ご自身が彼に託した任務を果たそうとして出かけました。¹⁸ 「エリヤはそこをたち、十二くびきの牛を前に行かせて畑を耕しているシャファトの子エリシャに出会った。エリシャはその十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。エリシャは牛を捨てて、エリヤの後を追ひ、「私の父、私の母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行ってきなさい。わたしがあなたに何をしたというのか」。エリシャはエリヤを残して帰ると、一くびきの牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従ひ、彼に仕えた。」¹⁹

¹⁷ ヘブライ書 12・18-24。

¹⁸ 列王記 上 19・16。

¹⁹ 列王記 上 19・19-21。

エリシャは農夫で、恐らく裕福でした（12 つがいの牛というのは大変な財産です！）。畑を耕していた彼は、エリヤのしぐさの中に全ての呼びかけを超える神の呼びかけを見ます。彼は無条件の“はい”で答え、家族、財産、仕事など、全てを放棄します。他の預言者たちと違って、彼は神から何ら直接のメッセージを受け取りません。彼とエリヤの間には何の仲介もなかったし、エリヤの命令や彼の任務について何の話も説明もありませでした。しぐさが一つあっただけです。そうです、ただ、しぐさがひとつです。しかし、そのたった一つしぐさは極めて重要な深い意味を持っています。何故なら、その外套はその持ち主のアイデンティティーと人格的品位を象徴しているからです。このしぐさによって、エリシャは、自分が今後エリヤと強く結ばれ、彼に愚直に従うよう動かされていると感じるのです。エリシャにとって、神から来る自分自身の召命を承認することとその召命を遂行することは、エリヤとの人格的関係を通して密接に仲介されているのです。後で、同じことが弟子たちと彼らのイエスとの関係に起こることになります。

師に対するエリシャの愛着はとても強かったので、この世からの旅立ちを準備しながら神との最後の出会いに向けて進んでいた時、エリヤは自分と別れるようエリシャに何度も命じるのですが、エリシャの答えはいつも同じでした：「主は生きておられ、あなたご自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません。」²⁰ 三度の求めに対して、三度とも同じ返事が返ってきました。エリシャにとって、エリヤに従う以外に人生の目標は考えられなかったのです。このエリヤへの愛着は絶対的な基準点となってしまっていて、その基準なしには、エリシャは人生の方向を見失ってしまうことになるのです。

とはいえ、身体的な別離は避けられませんでした。エリヤはこの世を去らなければなりませんでした。彼は自分の出エジプト、自分の最終的な過越しを為さねばなりませんでした。彼らはヨルダン川にやってきま

²⁰ 列王記 下 2・2、4、6。

した。「エリヤは外套を脱いで丸め、それで水を打つと、水が左右に分かれたので、彼ら二人は乾いた土の上を渡って行った。渡り終わるとエリヤはエリシャに言った。“私があるあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい”。エリシャは“あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせて下さい”と言った。エリヤは言った。“あなたはむずかしい願いをする。私があるあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない”。」²¹ エリシャはエリヤとの同行が奪い取られるのを受け入れるしかなかったので、せめて、エリヤの霊を受け継ぐこと、つまり、エリヤの霊的遺産を受け継ぐ長子となることを切望しました。²² しかし、そうなるためには、彼はエリヤの死の証人となり、預言者としてエリヤの死を体験しなければならないのです。もしエリシャが神との決定的な出会いを証ししないならば、彼はエリヤの精神を受け継ぐことはできないのです。仲介者としてのエリヤの任務が終了するのは、このエリシャの神との決定的な出会いにおいてなのです。仲介者の声が黙しても、神の啓示は成し遂げられます。何世紀も後に、他の弟子たちが神の国を受け継ぐ者として特別な地位に対する熱望をあらわにすることになるでしょう。イエスは彼らに答えます。「あなた方は、自分がなにを願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか？」²³ 生命の完成である過越の秘義の証人、その秘義の参与者であるためには、人は真の弟子、即ち、師の精神を真に受け継ぐ者とならなければならないのです。

エリシャは、エリヤが神の永遠の現存の中に移行する瞬間を共にする力を与えられました。「彼らが話しながら歩き続けていると、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天にのぼっ

²¹ 列王記 下 2・8-10。

²² この（あなたの霊の）“二つの分”という言葉は、律法に規定されたように、他の相続人の二倍を相続したいという彼の切望を指しています（申命記 21・17 参照）。

²³ マルコ 10・38。

て行った。……エリシャはエリヤが落とした外套を拾った。」²⁴ 今やエリヤの外套はエリシャのものとなっていました。彼は既に自分の遺産を受け取っていたのです。今や彼はヨルダン川の向こう岸に戻って自分の任務を続行するために、遺産を携えて引き返すこととなります。しかし、この聖書の物語は、エリシャがその霊的体験を更にもう一步進めねばならないことを私たちに示しています。聖書の物語は続きます：「彼はヨルダンの岸边に引き返して立ち、落ちてきたエリヤの外套を取って、それで水を打った。しかし、水は左右に分かれなかった。そこでエリシャは“エリヤの神、主はどこにおられますか”と言った。エリシャがもう一度水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた。」²⁵

彼がエリヤの外套で最初に水を打った時、水は左右に分かれませんでした。単に外套を所有したり、あるいはそれを使用するだけでは足りなかったのです。その力は外套の素材にはありませんでした。即ち、織物の中に特別なものはなかったのです。その力はそれを身に着ける人が神の人であるという事実から生じるのです。“エリヤの神、主はどこにおられますか？”。これこそが真の問いかけであって、外套を誰が持っているか、あるいは、外套がどうなるか、ではありませんでした。外套が真にエリシャのものとなり、エリシャがエリヤの精神を受け継ぐために、彼は自分自身を神に属する人へと変容させる必要がありました。彼は、“エリヤの外套”ではなく、真の力と権能の源であるエリヤの神、“主の外套”を相続することが本当は何を意味するのか、を体験しなければならなかったのです。こうしてこそ、彼は本物のエリヤの霊を身に帯びて向う岸に引き返すことができたのであり、彼の帰りを待っていた“預言者の仲間たち”は、その事実を承認したのです。²⁶

私たちの召命を生き抜くことにとっての創立者のカリスマは、エリシャにとってのエリヤの外套に相当するという類比が考えられるかもしれません。私たちの人生もまた創立者によって呼び出され、彼の中に包

²⁴ 列王記 下 2・11－13a。

²⁵ 列王記 下 2・13b－14。

²⁶ 列王記 下 2・15 参照。

み込まれてきました。しかし、真の後継者、創立者の精神のふさわしい担い手であるためには、外套という物質的な素材を単に受け継ぐだけでは足りません。同様に、創立者が創設した事業を受け次ぐこと、つまり、時代を超えて私たちに伝えられてきた遺産の世話をする任にあることも充分ではありません。そういうことだけではなく、それよりも、親しく彼に従って、創立者の特別な神体験と一つになるまで、私たちは創立者と共に歩むことが必要なのです。そうしてこそ、私たちは私たち自身の過越しの体験に至るのであって、創立者の精神の持つ力と彼の宣教活動の力強さはその体験から流れ出ているのです。結局のところ、私たちは創立者がそうであったように、“神の人”とならなければならないのです。そこで、“シャミナード師の神、彼の信仰体験の神”は、私たちの生活の何処に居られるのでしょうか？ この創立者自身の神体験との一致なしには、彼から受け継いだ“外套”は私たちの手の中で全く何の実も結ぶことはないでしょう。何故なら、私たちがどんなタレントに恵まれているとしても、それらのタレントは、私たちがマリアニストのカリスマの持つ本当の力強さと有効性を携えて、私たちが必要とし、私たちが待っている世界に出て行くことができるように、「水を左右に分ける」力を決して私たちに与えてはくれないからです。私たちは外套を高く掲げ、示し、描写することはできますが、結局のところ、外套は常に遥か対岸に留まったままとなるのです。

2.3 “私はあなたがたをキリストにおいてもうけました”

エリシャは、エリヤがどのようにして自分の前から取り去られたかを見た時、「わが父よ、わが父よ！」と叫びました。²⁷ 同じ叫びをもって、今や死の床にあったエリシャ自身が、彼を訪れたイスラエルの王ヨアシュから挨拶されることになります。²⁸ 人が神の人に従い、そうしながら、自分の召命と自分の人生のための神のメッセージを見出すとき、その神の人は父として認められるのです。

²⁷ 列王記 下 2・12。

²⁸ 列王記 下 13・14 参照。

事実、神のメッセージの仲介者となる人間は、単なるメッセンジャーに留まる事はありません。彼の仲介は何かを生み出す力があります。彼の仲介は人の信仰生活、つまり、聖霊における生活の誕生に参与します。それは人間の生命に関する父親の仲介と類似しています。「キリストに導く養育係があなたがたに一万人いたとしても、父親が大勢いるわけではない。福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです。」このように聖パウロは、彼の後にやってきた教師たちの見事な雄弁に心を奪われ、彼をないがしろにするように思われたコリント人たちを諭しました。ただ一人の“父”と、多くの人々であるかも知れない“教師たち”との間に使徒パウロが設けた区別は、神の言葉の仲介者として初めに信仰を伝えた者と、後で人がその信仰を理解し、生きるよう助ける人々との間にある違いに相当します。彼がこの区別を設けてくれたことで、パウロが神の父性の仲介者として自分の使命を生きたことが私たちには良く分かります。これは余りにも明白なことなので、パウロは次のように結論することをためらわなかったのです：「そこであなたがたに勧めます。わたしに倣うものとなりなさい。」²⁹

キリスト教的生命を生み出すのは使徒ではないこと、また、この生命は単なる模倣に格下げもされないことは明らかです。それは、彼の力、手腕、彼の教えに従うものを獲得するその説得力によって生まれたのもありません。ただ一人の父がおられ、その方が神なのです。この父は、ご自分の霊の授与を通して、子供たち、即ち、長子であるキリストの兄弟たちを生むのです。パウロはこの事を十分に意識しています。神は父であり、その前でパウロは「ひざまづき」、その御父から、「天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。」³⁰ 「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。然し、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。・・・わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あ

²⁹ 一コリント 4・15-16。

³⁰ エフェソ 3・14-15。

なたがたは神の畑、神の建物なのです。」³¹ とは言え、今述べた彼の確信にもかかわらず、疑う余地のない父性についてのパウロの主張は明白です：「キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです」。彼がコリント人にこう言うのを上でみた通りです。別の箇所で、パウロはガラテア人に叫びをあげています：「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。」³² 自分の信徒の前で、自分の兄弟としての身分だけではなくて、父としての身分をもパウロに主張させたのは、一体、何でしょうか？³³

コリント人に宛てた他の一節も、この主張が、パウロは自分の役務を単なる福音メッセージの伝達としてではなく、キリスト教的生命を生み出すに当たっての聖霊との親密な協力として体験したということに基づいていることを、私たちに理解させてくれます。尊敬を得るために彼は推薦状を必要としないことをパウロは思い起こさせます：「私たちの推薦状はあなた方自身です。それは私たちの心に書かれており、すべての人々から知られ、読まれています。あなた方は、**キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙**として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく、人の心の板に、書きつけられた手紙です。」³⁴

このイメージは深遠で、雄弁なものです。使徒の任務は神の言葉を告げるだけではなく、人々の心に“それを書き記す”ことです。テキストはキリストであり、筆者は聖霊です。この「書き記す」ことにおける使徒の役割は何でしょうか？ 詩編 45 (44) の出だしの節：「心に湧き出る

³¹ 一コリント 3・5-9。

³² ガラテヤ 4・19。

³³ 信徒の信仰を生み出すための神の道具である人に固有な父性についてのパウロの主張から直接的な着想を得て、ヒス総長は次のように述べています：「創立者は私たちにこの生命を与えるために天から使命を授かりました。正に、創立者は**霊的父親**という真の絆で私たちと結ばれているのです。』『創立の精神』、3-(1)、p. 6。

³⁴ ニコリント 3・2-3。

美しい言葉、私の作る詩を、王の前で歌おう。わたしの舌を速やかにもの書く人の筆として」に関する聖バジリウスの注釈がありますが、この注釈の中で、彼はこのパウロの一節に言及しています。この注釈は上記の問いに対する答えを暗示しています：

「専門家の手が文書の文字を記すために動かすものであるとすると、その筆は書き手にとっての道具であるように、**聖霊によって動かされる義人の舌は、墨ではなく、生ける神の霊によって、信じる者の心に永遠の生命の言葉を焼き付けます。**このように、聖霊は、知恵に満ちておられ、すべてを教えてくださいるので、筆者なのです。聖霊は速やかに記します、何故なら、聖霊のこころの動きは迅速だからです。聖霊は私たちの考えの中に、即ち、‘石の板ではなく、人の心の板に書かれるのです’。」³⁵

全く明らかであり正当なことですが、私たちは、創立者を「その舌」が私たちの心に永遠の命の言葉を書き記した「義人」の一人、と見なすことができます。更に私は、このことが自分の弟子たちに関するすべての創立者の究極的な願いではなかったかと思うのです。ですから、パウロの次の言葉を、あたかもシャミナード師自身の口から発せられたかのように、私たちの心の中に鳴り響かせましょう。「あなた方は、キリストが私たちを用いてお書きになり、墨ではなく、生ける神の霊によって書きつけられた手紙です。」私たちは、このパウロ書簡の箇所が続く次の言葉を、創立者が自分の言葉として裏書きし、宣言している、とさえみることができます：「わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。」³⁶

³⁵ 『詩編についての説教』 44・3 PG 29、396。

³⁶ コリント 3・4-6。

これらの言葉を心のなかに鳴り響かせるとき、私たちは、シャミナード師が、良き創立者として、どのように命の伝達者、聖霊の協力者であることを最優先の関心事として生きたか、を感じ取ることでしょう。このことを心に留めて、私たちは、1839年8月24日付けで黙想の説教師に宛てた有名な手紙の冒頭で師が強調したことを、より良く理解できるように違いありません。

「先の7月22日の回章で、私は両修道会の全会員の皆様に、**「教皇聖下のお望みは — そしてご意思でもありますが —、もしあなた方が堅忍するなら、あなた方は教会に有益な奉仕をなすことが出来るということを確認して、すべてがチャリティーである私たちの活動の精神を、あなた方が教え込むことである、ということを経皇教令の中で気づかれると思います」**と申しあげました。

御主イエス・キリストの代理者の命令を最善を尽くして果たすすばらしい機会が訪れています。教皇聖下にそれほど高く評価された私たちの会憲と私たちの事業の精神を教え込む好機が訪れたわけです。あなた方が指導しようとしている黙想について述べたいと思います。聖パウロの「文字は殺し、霊は生かす」という格言を充分にわきまえて、私たちの聖なる宣教使命のすばらしさと特別な性格を正しく教え込むよう努めてください。」³⁷

「神の現存と御業を仲介する生活」；「私たちに呼び掛けるみ言葉の声」；信仰の「父」；み言葉を受け入れ、み言葉に従うに当たって；聖霊に動かされて、私たちを「キリストの手紙」とする「ペン」；これらはすべて私たちが聖書の体験から学んできたイメージであり、神のご計画により、創立者が私たちの生活の中で占めてきた、そして、これからも占めていく役割を説明することができます。どうかこれらのイメージが、私たちが自分の召命を生き抜くに当たって当然占めるべき位置を創立者

³⁷ 『シャミナード師のマリアに関する記録』、第2巻、n. 69。

に与える助けとなりますように！



私たちの伝統における「良き父」(“Bon Père”) (“Good Father”)という表現の使用についてのノート

マリア会の伝統の中で、この称号は、創立者 福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードに対してだけでなく、彼の後を継いだ総長たちにも適用することが習慣となってきました。ここまで見てきたように、この称号を創立者に当てはめることはふさわしいと思われます。もし、パウロ的な意味で、つまり、自分の創設した共同体に関してパウロが自分の父性を理解した意味で、この表現が当てはめられているとすれば、創立者を“ボン・ペール”と呼ぶことはふさわしいことなのです。そうでなければ、私たちは次のように教えられた主の教えに従わないこととなります。「地上の者を誰も『父』と呼んではならない、何故なら、あなたがたの父は天の父おひとりだけだ」。キリストは、また、彼を「善い」と呼んだ金持ちの青年を、「善い者はただおひとりである」とたしなめられました。

とはいえ、こういう称号を総長たちに適用することが本当に適切であるかどうかについては、私には確信がありません。少なくとも私自身に関しては、自分の任務を「父」として理解しても生きていませんし、むしろ「兄弟」として理解し、生きています。私は自分を皆さんと同じ兄弟、同じ父親（ボン・ペール）の息子と思っています。パウロがコリント人に思い起こさせているようなユニークな父性をあえて持とうとすることなど、見当違いも甚だしいと思えます。恐らく、われわれ総長が望みうる最大のものは、使徒パウロの言葉づかいに従って、共同体の「教師」というカテゴリーで考えてもらうことかもしれません。

それでは、この件についての伝統を修正すべき時なのでしょうか？これは私自身が自らに問いかけている質問であって、私もこの質問に対する“権威を持った”(ex cathedra)といえるほどの明確

な答えを未だ持ち合わせていません。常に様々な解釈や説明の余地があることは私も承知しています。それで、今まで私が話してきたように、この称号を創立者のものとし、このようにして、私たちの生活における創立者の父性の持つ独自性を強調したいという私の希望を十分に表明して、この質問を考察と対話に向けて開かれたものにしておきたいと思います。

III. 私たちの「良き父」“Bon Père” “Good Father” 福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード

ここまで述べてきことを考え合わせますと、もし私たちが自分の召命を知り、愛し、これに従うとすれば、創立者を知り、愛し、彼に従う必要があることは自明の理です。「知る」、「愛する」、「従う」はこの回章のタイトルとして私が選んだ三つの動詞ですが、この三つは相互に関連し合っていて、バラバラに切り離してはならないものです。愛し、従うためには知らなければなりません。でも、私が第一部で示そうと努めたように、「外的な」知識では足りません。創立者を知るということは、内面的で、感情に訴え、実践的なものであること、つまり、生き生きとしたものである事が必要です。

私たちの創立者、福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードをもっと深く知り、愛し、彼に従うために、私たちはマリア会において**何をしてきたのでしょうか？ またこれから何をなすべきでしょうか？** これこそ、現時点で私たちが最も関心をもたなければならない質問だと私は信じます。この回章の第三部で、私はこの質問に対して答えようと試みることにしたいと思います。

3.1 ルイス・ゴンサルベス・ダ・カマラとロヨラの聖イグナチオ

この第三部を、イエズス会創立当初のポルトガル人のイエズス会員、ルイス・ゴンサルベス・ダ・カマラ神父の印象的な例をあげることから

始めさせてください。彼は創立者、聖イグナチオの忠実な弟子、崇拜者であり、聖人と個人的な影響を与え合うという幸運を持った人です。

聖イグナチオをもっと深く知ろうと熱望したルイスは、イグナチオにためらいと謙遜を置いて自分自身について語るようしきりに頼みました。彼は、聖人の霊的な歩みを分かち合う必要性について聖人を説得し、納得させました。彼の関心に動かされた聖イグナチオは、その懇願について熟考し祈りました。最終的に、「自分の魂が今までどれほどの道のりを経てきたのかを明らかにするために」、遂に数回の対談を持つことに同意したのでした。³⁸ 対話が終わる度ごとに、ルイス師は聖イグナチオが彼に語ったことを書き留め、こうして、彼のお蔭で、イエズス会はその創立当初から、『自叙伝』の名で知られる創立者の生涯の物語を持つことができたのです。この自叙伝は、聖イグナチオが自らの内的歩みを確認しながら、御主が彼の人生においてどのように働かれたか、神の現存を示す印しと出来事に対して自らの反応はどうであったか、について振り返っている報告です。

私がこの事実を「印象的な例」としてあげたのは、それが単に創立者に対する子としての敬愛の素晴らしい証しであるからではありません。私がルイス・ゴンサルベス師にあって真に模範的だと思うのは、— そして、だからこそ彼の例をここで引用したわけですが — 聖イグナチオの生涯についての彼の関心の深さということではなく（もちろんこれほど興味ある人格を前にしては当然の関心ではあるのですが）、むしろ、彼の熱意の理由、つまり、イグナチオの霊的体験を明らかにし、それを伝え

³⁸ 聖イグナチオが自分の生涯について語ることを決心するにいたった経緯を彼は次のように述べています：「一、二時間後に私たちが食事に行き、ポランクス師と私が聖イグナチオと一緒に食事をして折に、聖人は、ナタリス師や会の他の人たちから自分の生涯について語ってほしいとの依頼をたびたび受けてきたが、それまでは決してそれを受け入れようとはしなかったことを口にされました。とはいえ、私が聖人と話した後のこの機会に、彼は一人でこの件を熟考しました。そして、彼は語ることに同意してくれました。聖人の語り口から見て、神が彼に光を与えられたことは確かです。聖人はこれまでの彼の内的生活の主な点を明らかにすることを決意するとともに、打ち明ける相手として私を指名されたのでした。」（聖イグナチオの『自叙伝』序文）

る仕事にそれほどこだわるよう彼を動かした動機です。ここで特に強調するに値すると私が思うのは、これらの理由がイエズス会員としての自身の召命を生き抜こうとする彼の姿勢から流れ出てきていて、この意味で、上記の理由は情緒的というよりもむしろ神学的であったということです。彼自身が、聖イグナチオと共有した逸話と体験を含んだ『備忘録』と呼ばれる聖人についての彼のもう一つの著作の中で、これらのことを次のように述べています：

「修道会とはキリストの掟と勧告に従って生きる特別な道以外の何ものでもありません。修道会は人すべてに課せられる義務と共通の掟を誓願の宣立による完全な順守によって他と区別されるだけでなく、修道会自身も各自の特別な目的と、それに到達するために各修道会が選んだ手段によってそれぞれが他と異なっています。私はいつも、聖書が述べているような〈出エジプト：31・2...〉神のやり方に歩調を合わせなければならないと考えてきました。神はユダ族のフルの孫、ウリの子ベツアルエルを名指しで呼び、彼に神の霊を満たし、どのような工芸にも英知と知識をもたせ、金、銀、青銅による細工に意匠を凝らし、宝石をはめ込み、木に彫刻するなど、すべての工芸をさせました。またオホリアブを彼の助手とし、臨在の幕屋、掟の箱、その箱の上の贖いの座とモーセに命じたすべてのものをつくらせました。神がこの世に創設しようと望まれたどの修道会についてもこれは同様です。神は選んだ職人たちに呼び掛け、彼らがまさに必要とする恩寵と霊で彼らを満たし、掟を守り、神の崇拝の完全な順守のために捧げられた生きた幕屋と契約の箱の直接の創立者となるために必要な恩寵と霊で彼らを満たされるのです。

こういうわけで、建設工事に参加していた他の職人たちが、ベツアルエルとオホリアブを真似れば真似るほど完全になったように、自分たちの生活様式の中で完全を獲得したいとの大望を抱く修道者は、**自分の直属の創立者の精神を保持することに一意専念することが絶対に必要だと私には思えます；そして、修道会は、神がその**

計画を始めようとして選んだ者の模倣に向けて努力を重ねる限り、創立の純粋さに留まることができます。

だからこそ私は、1545年の復活祭に入会して以来、ロヨラのイグナチオ神父に会い、接することをいつも心から望んでやまなかったものであり、**彼こそ御主が模範として、会の全ての子が肢体となっている神秘体の頭として、私たちに与えてくださった方なのです。**³⁹

この神学的理由が、他の弟子たちをして自分の生涯について語ってほしいと聖イグナチオに願わせたものでした。もしイグナチオがそうしなければ、イエズス会の拠り所に何か重要なものが欠けてしまうと彼らは感じていたのです。その弟子たちの一人であるナダル神父が、ついにイグナチオがルイス・ゴンサルベス神父に自分のことを打ち明けることを決意したと聞いて、非常に喜んで述べたことを思い起こすことはとても興味深いことです。ルイス神父自身がこの喜びの反応を話しています。

「戻ってきたナダル神父は、この作業が開始されたことを知って非常に喜び、しばしば、「これこそあなたがイエズス会のためになる最上のことだ。何故なら、これこそまさに、基本的にイエズス会であるからだ」と私に言って、この作業を完成させるようイグナチオ神父にしきりに勧めるようにと私に話しました。ナダル神父自身もイグナチオ神父にこのことについて語り、私もこの作業のことをイグナチオ神父に思い起こさせるように、と言われました。」⁴⁰

3.2 マリア会における創立者についての知識

ルイス・ゴンサルベス・ダ・カマラの例を私がここで選んで述べたのは、この例が、私たちマリアニストの歴史の中の最も嘆かわしい欠陥の一つ、創立者についての無知、を対照的に明らかにする助けとなるから

³⁹ 『備忘録』、n. 1-3。

⁴⁰ 『自叙伝』の序文。

です。マリア会は、自らの創立者を知り始めるために、その死後、約半世紀たって、シムレル総長がその伝記を書くまで待たねばならなかったのです。シムレル総長自身、その序文でこの事実を認めています。

「1870年から1871年にかけてパリが長く包囲されていた間、私たちはマリア会の資料室をくまなくかき回して引きこもりの時間を費やしていましたが、その時、私たちの注意はマリア会創立者シャミナード師に関する資料に引きつけられました。この資料を読むことは、私たちにとって何という啓示となったことでしょうか！

シャミナード師は、師が宣教活動をなした地域においてばかりでなく、師が創立し、また、その精神を生きその指導の下に機能し続けていた修道会の中でさえ、私たちが考えていた以上に知られていない人である、ということが私たちにわかってきました。私たちは師が、「無名なものであること、何の値打ちもないと見なされることを愛しなさい」という優れたキリスト教的教訓を常に弟子たちに要請し、自らも実践していたことをよく知っています。そして、この隠れた生活への愛は、彼がどのようにして大衆の注意を引くことなく生き、また、大騒ぎを起こすことなく死ぬことが出来たか、を説明するものでした。しかし、果たしてそれは、この熱心な使徒の人柄と活動をその後覆い隠してきた沈黙を正当化するのでしょうか。あの長期の沈黙や明らかな忘却は、果たして、今日どのような正当化を見いだせるのでしょうか。これらのことは、特にシャミナード師がその創立者である修道会においてこそ、むしろ嘆かわしいのではないのでしょうか。」⁴¹

創立者についての無知を、『キリストの模倣』の金言に忠実に生きた創立者の慎み深さに起因するとしたのは、シムレル総長の親切さだと私は思います。これに関連して他の理由も考えられます；例えば、創立者が特定の共同体の中に入って生活したことが一度もなかった事実や、創

⁴¹ ヨゼフ・シムレル『マリア会及び汚れなきマリア修道会の創立者 ギョーム・ヨゼフ・シャミナード伝』松口廣見訳、XX。

立者の晩年における彼と会のリーダーたちの間に見られた無理解、緊張、問題から来る創立者の思い出の上に漂う不吉な影、などです。いずれにせよ、その主たる原因は、イグナチオの場合と比べて私たちが見ているように、創立者に関する知識は、自分たちと後に続く人たちの召命を理解し、生き抜くために重要な役割を果たすのですが、マリア会は、その重要性を把握するのに必要な鋭い神学的洞察力を具えた会員を、初期マリアニストの中に持つという幸運に恵まれなかった、ということにあるのは確かです。

ですから、マリア会が間違いなく必要としていた創立者に対する「孝愛の精神」を生き、私たちに伝えてくれたシムレル総長に、私たちは深く感謝せねばなりません。合わせて、彼が、マリアニスト家族全体にとってのこの知識のもつ重要性に気づいて、シャミナード師の伝記を書こうと示唆を受けたことにも、私たちは感謝します。シムレル総長のおかげで、私たちは創立者を発見し始めることができます。半世紀後とはいかにも遅いのですが、格言がいうように、「良い知らせには、遅すぎることはない」のです。

シムレル総長によるシャミナード師の伝記の発表は、その後の会の歴史の中で大きな重要性を持つもう一つの文書、『創立の精神』の出版を待って、数年後に、十全な意味で完成されることとなります。その序文の中で、ヒス神父は、シムレル総長の著作が会にもたらした計り知れない功績に触れた後、この著作をシャミナード師の精神に関する他の著作でもって敷衍する必要がある、と述べています。これらの他の著作についてはシムレル総長がすでに心に温めていたものであり、彼は、文書的・歴史的研究によって彼を助けていた秘書のクロップ神父がこれを成し遂げてくれるであろうと考えていました。

「しかし、彼等はこの伝記を読んでいくにつれて、新しい要求が湧き上がるのを感じた。それは、創立者の内心の思想をさらに深く研究して直接確かめること、また会の創設と初期の発展の原動力となった根本の理念に関する正しい文献によって、会の事業の精神・

目的・組織について、当初から計画され決定されてきたとおりに、最終的な記録を作るという要求であった。」⁴²

そして、近づく百周年を前にして、彼は自問します；

「今そのことについて考え、われわれにとってそれ程記念すべき出来事の祝典の準備をすぐ始めることは早過ぎることでしょうか。さらに、万全の準備は、熱心を倍加させること、われわれの心の中に**創立の精神**を維持し、新たにすることではないでしょうか。なぜなら、もしある修道家族がその生き生きとした活力、その固有の精神、その事業体の真の姿を完全な状態で保つことを願うとすれば、その修道家族は自分たちの揺籃期を調べなければならないからです。その修道家族は、そこに、自分たちの創立者を、言い換えれば、神が御摂理によって決定した事業を行うために選んだ人物、また、このような使命のために必要なすべての素質と恩恵を豊かに授けた人物を見出すのです。」⁴³

1905年の総会をして、師の書簡の刊行を後に回して、『創立の精神』の刊行を進めるという決定をさせたのは、シャミナード師の精神と、そして、それと共に、師が設立した事業の魂を取り戻そうというこの望みだったのです。創立者の精神は、シムレル総長とクロップ神父が集め、研究した膨大な資料の中に含まれていました。彼らは、この時点で、この情報を何らかの方法で知らせようと試みました。こうして、この努力は様々な段階で現れました。『創立の精神』の出版は組織的なプランに従ってなされましたが、彼らは、創立者自身と師の最初の弟子たちに由来し、それ故、「基本的なもの」と見なされうる資料を選択しながら、そのプランに基づいて私たちの生活と使徒職の種々の観点を取り扱うつもりでした。

⁴² 『創立の精神』、3-(1)、p. 1 以下。

⁴³ 『創立の精神』、3-(1)、p. 3。

『創立の精神』は、マリア会が創立者の靈感と思想に関する理解を採り出すことを要求する最初の道具としての効力を持ちました。終に、兄弟たち、特に、養成担当者たちは、会のカリスマを構成する主要軸を提示し、展開する文書を手にする事ができたのです。とはいえ、カリスマに関する研究と考察を進めていくという目的のためには、この文書はまだ不十分でした。一方では、引用された基本的な文献はほんの僅かでしたし、他方では、それらの文献もあらかじめ定められたプランに従って選択されたものだったからです。私たちの精神を知らせるための最初のまとめとしては優れたものでしたが、この文書の刊行で会は満足することは出来なかったのです。カリスマについての知識を深め、異なった歴史的、文化的背景からそれについて研究するためには、文献の一部だけではなくて、文献全体に目を通すとともに、厳密な科学的基準に則して行うことが必要だからです。

『シャミナード師の手紙』の刊行は、この意味で、非常に重要な前進となりました。この書簡集は、それぞれの前後関係がしっかりと捉えられており、創立者の考えと感情に直接に近づく可能性を提供してくれます。ですから、この原典は創立者を内的に理解するために欠かせないものです。然しながら、この書簡集ほど詳細なものではなく、もっと一般的なその他の文書もまだ全部残っており、それらの文書の中に、創立者は自分が御主から靈感を受けた計画についてのビジョンと、その計画に命を吹き込む教義的、靈性的な原則を全部注ぎ込んだのです。

幸いなことに、20世紀半ば以降、先人たちの模範と創立者への大きな愛に勇気づけられた数名の兄弟たちが、将来のためにその重要さを確信して、証拠となるあらゆる文献を整理するという困難な仕事に、生き生きと積極的に取り組んでくれました。私たちが承知しているように、彼らのお蔭で、シャミナード師の生涯はより深く研究され、一連の原典が収集されて出版されました。それらの原典は、注意深く日付を付され、叙述され、注釈をつけられ、多くの場合、彼らに靈示を与えた資料にも

言及されています。⁴⁴ この件に関して、例えば、ジャン・バプティスト・アンブルステル神父やヨゼフ・ヴェリエ神父の働きが全マリアニスト家族にどれだけの貢献をもたらしたか、どうしても深い感謝の念を込めて思い起こさずにはられないのです。

このようなすべての努力は『文書と言説』(Ecrits et Paroles)の刊行をもって最終的に完成し、その最終巻である第七巻が、丁度今年(2010年)、出版されたところでは、私がこの記念碑的な書物の後記に記したように、この文書の刊行は「全マリアニスト家族にとって計り知れない価値を有しています。今回の文書とシャミナード師の書簡集を含むこれまでの刊行物をもって、私たちは初めて、総本部資料室に保有されている創立者に関して知られている全ての文書を所定の読書や研究の場で用いる可能性を手に入れているのです。今まで、私たちは断片的な刊行物を利用することしか出来ませんでした。今や、私たちは、批判的注釈と詳しい時代背景付のこの原典を、利用できるものとして手にしていますが、この原典は、読むためだけではなく(ある文書が断片的なものに留まるため、時として読むことは困難ですが)、研究するためにも魅力的なものです。原典を読むこと、原典を研究すること、この両方が必要です。これからは、創立者の思想についての私たちの考察には、そのために必要な深さと厳密さに至ることが出来るための不可欠な拠り所があります。時として、源泉、あるいは、時代背景への正確な照合が欠けていたために、この拠り所が見つからなかったのです。『文書と言説』(Ecrits et Paroles)の全巻刊行をもって、今や、私たちは正確で貴重な道具を手に入れています。これは、シャミナード師が言いもしなかったことを師に言わせるのを避けさせ、また、師が言ったことと言おうとしたことを、もっと良く理解させる助けとなるのです。⁴⁵

⁴⁴ 皆さんがご承知のように、私はここで次の出版物に言及しています。

『Les Notes d'instructions』(仏語、スペイン語)、『黙想指導に関する覚書』、『指導書』、『マリアに関する記録』、『念とうに関する記録』、『信仰に関する記録』 etc...。これらの出版物は、この50年間の私たちのシャミナード的精神の理解に、大きな貢献をしてくれました。

⁴⁵ 『文書と言説』(Ecrits et Paroles)、第7巻、p.705 s (仏語版)。

3.3 創立者の道をたどる - 私たちが今からなすべきこと

この文書刊行の努力の結果は、この 50 年間に姿を現してきました。私たちはマリアニスト・カリスマの諸側面に関する一連の研究論文、調査、パンフレット、研究を目にしてきましたが、この中で、創立者の思想と生涯に深くまで分け入ったものはごくわずかでした。創立者に関する知識を深めることは、私たちにとって進行中の仕事として留まっています。創立者の生涯がここ数年、特にその列福式以降、良く知られるようになったのは事実です。でも一般的には、私たちは今語られていること以上のことはほんの僅か知るだけです。私たちの大部分の者にとって、シャミナード師についての知識は、師の生涯の幾つかのエピソードや師の思想についての幾つかの見解に留まり続けています。これらは、創立者について一般的な話をするためには充分ですが、マリアニストとしての私たちの修道生活を養うためには不十分です。創立者の生涯と思想についての知識をもっと深めることが必要です。全マリアニスト家族を挙げて、私たちはこの研究と考察に力強く取り組む必要があります。肝心なことは、創立者の生涯と彼が根本的に目指したものを、それが私たちの霊的、宣教的な生活にとって含蓄している全てのものと共に、私たちがこれまでよりももっと深く把握できることなのです。

この努力の結果が本物であるためには、私たちは幾つもの危険を避ける必要がありますが、実際には、この件について私たちが書いたり、話したりするものの中で、必ずしもこれらの危険を避けてきたとは限らないのです。私たちは余りにもしばしば、創立者の言葉やその生涯の出来事を、先入観を持って選択してしまい、こうして、自分たちの個人的考え方に一番“ぴったりさせる”ためにそれらを全体の文脈から切り離したり、その時代の状況、背景から取り出したりする誘惑に屈してしまうのです。時として無意識のうちに、私たちは、創立者にしてみれば全くの時代錯誤の、現時点での仮定をもとに解釈してしまうことがあります。創立者の思想を時代に合わせて今日の言葉に置き換えるのは一つのやり方でしょうが、しかし、あたかも創立者の思想が私たち自身の歴史的、社会的、教会的背景から出てきたものであるかのように解釈することは

見当違いも甚だしい、ということを中心に留めておくことは重要です。もしシャミナード師が現代に生きていたらどうするだろうかということを知るのは、ある人が「彼はこうするだろう」と言うようには、簡単なことではありません。先ず、私たちは創立者の生きた時代について、そして、師がどのように生きたかをもっと知らなければなりません。もしそうしなければ、私たちは師に取って代わろうとする誘惑に陥ってしまいます。即ち、自分自身の計画を正当化しようとして（創立者の思想全体から切り離された）アイデアを師から盗み出して、自分自身を創立者の位置につけてしまう誘惑に陥ってしまうのです。

これらの危険を避け、浅薄さに陥らず、創立者の思想との一貫した結び付きを保証するために、私たちは創立者に関する研究の歴史的、文書的な厳密さに充分留意する必要があります。文書的な正確さについては、私たちは言い訳できません。これまで見てきたように、今や私たちは全ての手段を手に行っているのですから。しかしいつもそうであるように、残念ながら、また、幾分かは、原典の言語を知らないために、ある人たちにとっては要求される訓練に従事することは困難かもしれません。然しながら、歴史的正確さに関しては、私たちにはそれを確かめる手段がそれほどありません。シャミナード師がその生涯とミッションを訓練し、育み、展開した固有の背景に関する優れた研究が依然として私たちには欠けています。それでも、次のことを知ることは重要です：創立者は天から降ってきたのではないこと；彼は一つの時代とその環境の子であること。とはいえ、このような不足は、ただ私たちの前進しようとする努力を更に勇気づけ、真剣に、また、正確さをもって創立者の生涯と精神の研究を継続させるのみです。

これまで辿ってきた道とこれから踏破しなければならない道を確認した今、私は全般的に全マリア会に、特別に各行政単位の皆さんに、改めて正式な呼びかけをさせて頂きたいと思います。何よりも先ず、初期養成ならびに継続養成と同様、特に、独特なマリアニスト養成プログラムにおいて、創立者の研究に最大の注意を払うよう、私は皆さんにお願いいたします。次に、マリアニスト養成・研究センターに適切な人材を配置

するためには、私たちはシャミナード師とマリアニスト・カリスマに関する熱心な研究に従事する兄弟たちを必要とします。それは、クロープ師やシムレル師に代わってその仕事を継続し拡張した兄弟たちの努力を更に継続し拡張するためです。私たちはこのマリア会への奉仕を若い修道者の間に促進させるとともに、「それほど若くはない」が、その知識、関心、技能を用いて非常に貴重な貢献を期待できる兄弟にも参加してもらう必要があります。他の役務のためにこれらの人材を“失う”ことになるのを恐れてはなりません。この奉仕なしには、マリアニストの生活とミッションそのものの未来を失うことになるでしょう。この奉仕は将来と非常に深く関わっているので、そのための努力は、たとえ何であれ、若い行政単位や新しい創設体において、より必要、緊急であることを忘れてはなりません。これらの行政単位や創設体において、私たちマリアニストの生活とミッションは新しい現実を受肉しなければなりません。その際、この受肉は私たちの生活とミッションの持つマリアニスト・アイデンティティの強さと成熟さを決して減少させるものではない、という確信をもってなされねばなりません。



この回章を終える前に、すべてが正しく理解され、そこから出てくる結論が正しく解釈されるために、基本となる原則を改めて強調してみたいと思います。私は創立者について広範囲にわたって述べてきましたが、この回章で何度も申し上げましたように、そのような知識は創立者の真価を認め、彼に従うように私たちを導くものでなければ充分ではありません。創立者という人物への私たちの関心の最終目的は、彼と一体化すること、つまり、彼との一致のうちに生きることです。創立者の靈感とカリスマの豊かさは、これまで述べてきたように、彼の生涯の聖性に立脚しています。それで、これが意味することは、私たちが私たちのカリスマを将来に向けて永続させることについて語る時、それは歴史の中に延長させること、即ち、創立者の教義的、宣教的働きだけではなく、何よりも、創立者の生涯の聖性を延長させることです。ですから、それは、創立者について知ることを通して、彼の精神を努力して身につけること

を意味します。御主が望まれるように、今、ここで、私たちがマリアニスト召命に答えるためには、文書、計画、提案だけでは足りません。私たちの世界にあって、私たち自身が創立者の目、創立者の心とならなければなりません。即ち、私たちは、彼のように凝視し理解する目、彼を感動させたもので感動し、彼が愛したものを愛して、彼のように感じる心、にまでならねばならないのです。

この回章を終えるに当たって、シラ書の一節をここに引用させていただきます。信仰の道を私たちに先駆けて進んだ先祖たちの追憶と讚美に捧げられた段落への導入において、賢者は次のように述べています：

「しかし、先祖たちの中には、後世に名を残し、
輝かしく語り継がれている者のほかに、
忘れ去れた者もある。
彼らは、存在しなかったかのように消え去り、
あたかも生まれ出なかったかのようなようである。
彼らの子孫も同様であった。
しかし慈悲深い先祖たちの
正しい行いは忘れ去られることはなかった。
彼らの子らのもとに、
良き遺産、孫たちが残る。
彼らの子孫は契約を守り、
先祖たちに倣ってその子供たちも契約を守る。
彼らの子孫はとこしえに続き、
その栄光は消え去ることがない。
先祖たちのなきがらは安らかに葬られ、
その名はいつまでも生き続ける。
諸国の民はこの先祖たちの知恵を物語り、
神の民は先祖たちをほめたたえる。」⁴⁶

⁴⁶ シラ書 44・8-15。

このように、私はこの回章を、私たちの特別な救いの歴史の一部分であったこの比類ない“慈悲深い人”、福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードの追憶と讃美に捧げてきました。今や私は、ただ、聖書から取られたこの英知に満ちた一節に照らされて、すでに表明された願いをもって、この回章の結びとすることが出来るだけです。

神の恵みによって、私たちが、その財産が残るあの孫たち、即ち、その子孫はとこしえに続き、その正しい行いは忘れ去られることはなく、その希望は決して消えることがなく、その知恵は物語られ、教会によってほめたたえられる、あの忠実で聖なる人生、となる道を知ることができますように。

全人類の救いのためマリアの子となった神の子
イエス・キリストにおける皆さんの兄弟

マリア会総長
マヌエル J. コルテス, SM

ローマ、2010年9月12日
マリア会の保護の祝日である
マリアのみ名の祭日に